

平成11年3月15日<月曜日>

遊歩道

二十一日は春分の日です。そこで質問。次のこととは正しいでしょうか。

①立春の日は、暦の上でも冬である。

②春分の日、昼の方が夜よりも長い。

③夏至の日は、その翌日より日没が早い。

まず①について。よく「立春は暦の上では春なのにたいへん寒い」と言います。しかし、立春は二十四節気の一つですが、これは一月下旬の大



立春・春分・夏至

小椋 仁志

寒、三月下旬の啓蟄、七月下旬の大暑のよつに、季節感に合うものです。また、上の字が動詞の熟語は下の字は目的語ですから、立春は「春に立つ」となります。春に向かう平線に出始めた時、日没

次に、春分の日ですが、昼と夜の長さが同じと思っ

最後は六月二十二日の夏至です。昼が一番長い日なので、この日に日没が最も早く日没は最も遅いと思いがちです。しかし、日没が最も早いのは十四日、日没が最も遅いのは三十日と数日ずれています。ですから、夏至を過ぎても日没は徐々に遅くなっているわけ

以上、立春・春分・夏至の意外な盲点を簡単に紹介してみました。(①については私見です)(シオトップ技術部長)

平成11年3月29日<月曜日>

遊歩道

大阪から東京に転動して八年。どうしてものないのが、うどんの黒いつゆ。つゆで黒く染ま

ったうどんを見ると、かわいそうになる。

関西の薄い(茶色)つゆが黒くなるのはどこからか。私はこれを二十数年前に調べた。

大阪から東京まで各駅停車に乗り(ちなみに現在、鉄道等の全線乗車記録保持)、乗換え駅でホ



うどんのつゆと砂の色

小椋 仁志

ームの立食うどんを食べ続けた。その結果、境目は掛川だった。N食品のカップうどんも関西風と関東風とが売り分けられている。もの本によると、浜松が境目とのこと。これら、体重六万ト

どちらか静岡県である。これを私の専門の地盤工学に結びつけると、境目は日本の地質構造を東西に分ける糸魚川静岡構造線となる。

また、海岸の砂の色も

のゴジラが軟弱地盤上を歩けるか否かの考察とともに、数年前、地盤工学の学会誌に発表した。ところが、二年前、再び立食うどんの調査を試みたところ、ちよつと

おかしい。滋賀県米原は茶色のままのだが、岐阜県大垣では黒色に変わっている。N食品に問い合わせると、現在は関ヶ原で売り分けられているとのこと。境目が、静岡県から関ヶ原まで移動したことになる。ここにも関西文化圏の後退、東京一極集中の影が見られる。では海岸の砂の色はどうか。小椋の法則によると、砂の色も変わっているはずだ。早速、調べてみたが、確認できなかった。関が原付近には海岸がなかったのである。(シオトップ技術部長)